延慶本『平家物語』硫黄島譚の実体密着性

――〈硫黄島熊野〉の発見――

野中哲照

はじめに　―重層構造としての延慶本『平家物語』―

延慶本『平家物語』[1]の硫黄島譚は、現地の実体に根ざした部分を有している――これが、小稿の主旨である。たとえば、康頼らが熊野三山を当地に勧請して熊野詣でをしたとか、三人が海の近くに住んでいたらしいとか、エビス三郎殿の祀られる岩殿を彼らも巡拝していたなどという部分についてである。

『平家』がその前半部（清盛の死去あたり）まででいったん成立したとする考え方〔冨倉徳次郎（一九六四）など〕は、相応の説得力がある。その前半部において、質・量ともに大きなウェイトを占めているのは、鹿の谷事件関連話だろう。ここにこそ、『平家』成立の始原的な様相を窺う鍵が隠されているとみる。

『平家』の鹿の谷事件関連話は〈『平家』以前〉の要素を色濃く残しているとみるわけで（詳細は別稿[2]）、その中でも、最辺境の地に流罪にされた者がまれまれにして帰洛を果たすという硫黄島譚は、その非日常性ゆえに衆目を浴び、早い段階で物語化の道を歩み始めたものと考えられる。そして、延慶本においては、硫黄島譚とリンクして崇徳院怨霊譚などが位置づけられているため、硫黄島譚は鹿の谷事件関連話の中における核（コア）のような位置を占めている。

小稿で述べようとする実体密着性は、その〈『平家』以前〉の要素を指摘しようとするものである。〈歴史上の実体に依拠した部分〉という基層を物語内に探ることができれば、そこから肉付けされ、タマネギのように重層的に物語が成長してゆくさまを解明する端緒になるものと考える。

二　康頼像の実体と熊野参詣

延慶本『平家』の硫黄島譚の中心人物は――覚一本などとは違って――詳密な熊野三山勧請話や康頼・俊寛禅宗問答話の存在に窺えるように、間違いなく平判官康頼である。

キーワード：平家物語、熊野三山、薩摩硫黄島、俊寛、康頼

『梁塵秘抄口伝集』巻十に、「中頃、広言・康頼こそ、（後白河院がつねに）具して歌ふ者にてあれ」とあり、また、同書の語る仁安四年（一一六九）正月の熊野参詣に、康頼は藤原成親・藤原親信・平業房・藤原能盛・藤原親盛・平資行とともに近侍している。この七名のうち資行は新参で、残りの六人について馬場光子（二〇一〇）は、「法住寺広御所の今様の会に同席していた者たち」であり、とくに「その中の業房・能盛・康頼・親盛の四人」は「院に非常に密接した近臣集団」であるとする。歴史上の実体としての康頼が、後白河近臣の五本の指に入るほどの者（政治的分野ではなく趣味的分野で、というべきか）であったことは間違いない。

延慶本の康頼像も「康頼入道ハ洛中無双ノ（馴子舞の）上手ナリ」「聖照（＝康頼）ガ第一ノ能ニハ今様コソ候シカ」と表現されているが、これは『愚管抄』巻五の「康頼ナド云フサルガウクルイ物」とも符合するし、『梁塵秘抄口伝集』巻十の「康頼、声にをきてはめでたき声なり」「沙羅林・早歌など、弁へ歌ふこと、心得たる上手なる」と語られる康頼像とも重なる。源健一郎（一九九一）が、延慶本の康頼像と『梁塵秘抄口伝集』巻十のそれとが一致すると指摘したとおりである。

熊野研究の成果〔松田文夫（二〇〇四）など〕を総合すると、後白河院は永暦元年（一一六〇）十月以降、年一、二回のペースで最終回の建久二年（一一九一）四月までの約三〇年間において三十四回の熊野参詣を果たしたとされる。その参詣回数と年月日記述が一致する資料としては、『梁塵秘抄口伝集』巻十の仁安四年（一一六九）正月の参詣が「第十二度」であったとする記述が知られていて、生涯参詣回数（三十四回）と整合的である。

このことはまた、康頼が安元三年（一一七七）に硫黄島に流された時点で「十八度」の参詣を果たしていたとする延慶本『平家』の記述とも齟齬しない（後白河に随伴した参詣はこのうち三回）。『梁塵秘抄口伝集』巻十には、後白河院が広言・康頼とともに新熊野神社に参詣した際の話を載せているが、馬場光子はこのエピソードを一一六五年以降のことかと推定している。一一六五年は、康頼が二十歳[3]と推定される年であるから、この頃から康頼は後白河院に近侍し始めたのだろう。これ以降、年に一、二回のペースで一一七七年前半まで康頼が熊野参詣を果たしていたとすれば、約十三年間で「十八度」程度となる。

延慶本『平家』の康頼像のすべてが歴史的実体（史実）に根ざしたものだなどと言うつもりはない。康頼像自体が重層的な形成を経ているらしい（別稿）。しかし、延慶本の康頼像の核になる部分に、実体と齟齬しない康頼像が含まれていることは否定しようがない。

その康頼が、生きて硫黄島から帰洛したのである。康頼だけではない。成経も赦されて帰洛し、三年後に復官を果たした。成経は、養和二年（一一八二）に従四位上、翌年、平家が都落してのち右近衛少将に還任し、のち参議・右中将・正三位まで昇った。建仁二年（一二〇二）まで生存している（四十七歳）。

僻遠の島ゆえに硫黄島の描写などは都人の想像の産物であろうと片付けるよりも（その一面があることは否定しないが）、この二人

二

から発信された硫黄島の情報が、『平家物語』にも流入したと考えるほうが自然ではないだろうか。

三　硫黄島までの経路の実体密着性（前稿の要約再述）

まず、硫黄島に至る経路からして、延慶本の記述が現地の実体を反映していることを指摘したい。

これまで、延慶本にみえる「端五嶋（くらいらしま）ハ昔ヨリ日本ニ随フ嶋ナリ。奥七嶋ト申ハ、未ダ此土ノ人ノ渡タル事ナシ」の記述は、十分には読み解かれてこなかった。前稿で述べたので詳細は省略するが、その要点は次のとおりである。

①屋久島と口之島の間の海域に、古代日本人は国境の意識をもっていた。

②「端五嶋」は、種子島・屋久島・口永良部島・硫黄島・竹島の五つの島。黒島は外れる。

③種子島―屋久島―口永良部島―硫黄島―竹島の航路が一般的であった。すなわち、薩摩からではなく大隅から硫黄島に渡るのがふつうであった。

これを踏まえて前稿では、延慶本『平家』の「端五島ガ内、少将ヲバ三ノ迫ノ北ノ油黄島…（中略）…ニゾ捨置ケル」という表現に注目した。「三ノ迫ノ北」の「北」とは、南からの経路で「北」、すなわち〝向こう〟だと説明しているということである。逆の想定をしてみるとわかるが、薩摩半島から南の硫黄島への経路を説明するのに、ある目印の「北」（＝手前）などという説明は、ふつうありえない。この表現は、口永良部島からの視座、もっといえば種子島航路が露呈したものと見てこそつながるものなのだ。「三ノ迫」に相当する「デン島」という島が存在することも、前稿で指摘した。

延慶本の表現で、現地の実体と符合する表現が、もう一つあった。康頼・成経が帰洛を許されて硫黄島を離れてからの、「少将ハ九月半スギテ嶋ヲ漕出テ、風ヲシノギ波ヲワケ、浦伝嶋伝シテ、廿三日ト云ニハ九国ノ地へ付ニケリ」という表現である。「九月半スギテ」出帆し「廿三日」に「九国ノ地」に到着しているのだから、約一週間かかっていることになる。硫黄島―口永良部島―屋久島―種子島―大隅半島の航路ならば、「浦伝嶋伝」の表現とも齟齬しないし、風待ち波待ちしながら約一週間かかったという日程とも符合する。

前稿で述べたことは、おおよそ以上のようなことであった。康頼・成経・俊寛の三人は死罪一等を減じられ、遠流の中の遠流、つまり日本の最辺境へ流されたということなのだろう。それが結果的に、当時の国境の島である硫黄島だったというわけである。

四　硫黄島総体の描写の実体密着性

この節では、硫黄島総体の描写について、実体と合うのかどうか検討したい。諸注釈で『平家』硫黄島譚が『新楽譜』や『和漢朗詠集』の影響を受けた描写を含んでいると指摘されているし、大石直正（一九八〇）が指摘するように境外の民として観念的に島民を形

象しようとした部分もある。都人が想像を膨らませて硫黄島や島民を描いた部分があることは否定しない。硫黄島譚の記述や描写を重層的に形成されたものと想定し、その中核的部分に、実体に密着したところを探ろうとしているのである。

まず、硫黄島の様子を「其地乾地ニシテ、田畠モナケレバ米穀モナシ」と表現する点については、『三島村誌』第一編に「頂上一帯の噴気孔から噴出する亜硫酸ガスは時には酢雨（酸性雨）となって部落に降下し農作物に被害を受けることがある」とあるように、たしかに昔から田畑はない。現在の島民もそう証言している。同書第四編に、古老談として水田耕作のあとが硫黄島にも存在した可能性に言及しているが、それも一時期に終わったということだ。

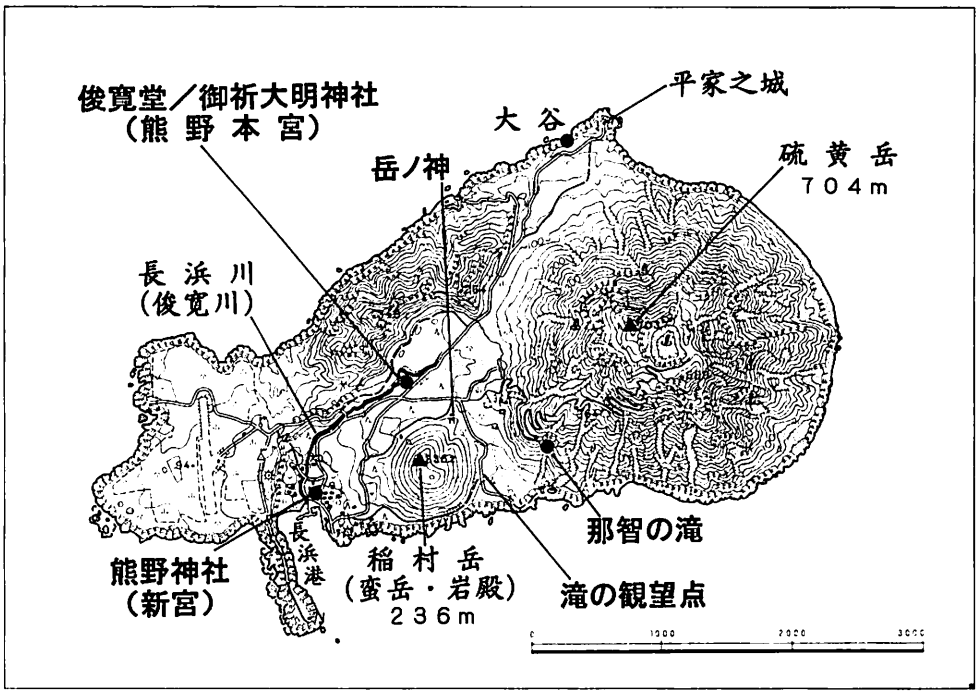
次に、「嶋ノ中ニ高キ山アリ。嶺ニハ火モヘ」の描写についても、硫黄岳の様子と符合する。硫黄岳は現在なお噴煙を上げ続ける活火山である。「此山ノ岸ニ上リテ流黄ト云物ヲ取テ」についても、佐倉由泰（二〇〇六）が指摘するように硫黄島で硫黄を産出することと符合する（ただし、この表現は「有王丸油黄嶋へ尋行事」のものなので、後次的に流入した可能性もある。私は、有王説話全体の後次性を想定している）。

さらに、「麓ニハ雨降テ、雷鳴事隙ナケレバ」の部分についても、「年間総雨量三一二五ミリメートルは屋久島に比べると少ないが海洋島としては多い」（『三島村誌』）とある。さらに、開聞岳の貞観・仁和の大噴火、富士山の延暦・貞観の大噴火などから平安期には日本列島の火山全体が現在よりも活発な火山活動をしていたとされ、硫黄岳の噴煙を雲核としたスコールのような雨粒が、現在以上に頻繁に降っていたのではないかと推測される。

四　五　三人の居住地と「蛮岳」「岩殿」との位置関係

康頼・成経・俊寛の三人が硫黄島の中で住んだ場所は、島の北側だと考えられる。それは、延慶本の、「少将、判官入道ハ、思ニモ沈ミハテズ、常ニハ浦々嶋々ヲ見廻シテ、都ノ方ヲモ眺メヤル」という表現から窺える。海を見ながら抽象的に〝都を想う〟と語っているのではない。海を隔てて「都ノ方」を「眺メ」ていたのである。島の南側や西側から、都が存在する方角として海の向こうを眺めることはできない。島の北側か東側を想定すれば、都の方角であるし、岩礁などの「浦々嶋々」がたしかに見える。しかも、「此ノ人々ノ住所ヨリ南ノ方ニ五十余町ヲ去テ、一ノ離山アリ」の表現は決定的である。三人の住んだ場所がもし島の南岸地帯であったなら、三人の「住所」より「南ノ方」に「五十余町」も進むことなど成り立たない。この表現によって、三人の居住地は島の東側ではなく北側だということも確定する。

ここに出る「離山」とは、独立峰という意味だろう。硫黄島の南岸近くに稲村岳という独立峰がある（地図1）。別稿で詳述するが、稲村岳という名称自体にエビス三郎信仰の片鱗が窺えることが判明した（エビスと同義のヒナモリ→イナモリ→イナマル→イナムラ）。三人は、島人が「エビス三郎殿」を祀ってある「岩殿」を〈硫黄島



地図1　硫黄島の熊野三山

熊野）（後述）として祀り直し、その周辺を巡拝したというのだ。そのような名称を持つ稲村岳が、島の南岸に位置し、「離山」であり、島の北側から「五十余町」の位置にあるのだ。

また、「少将、判官入道ハ…（中略）…流黄津ト云所ヘ移ニケリ。僧都余ノ悲ニ船津マデ来テ」とあるように、赦免船はまず三人の居住地の磯に直接接岸したのち、島の本来の港「流黄津」に移動したと読める。俊寛も「船津マデ」それを追ってきたというのである。通常、船が三人の前に現れたら、着岸したその場所から出帆すれば良さそうなものである。つまり、この〝移動〟は、物語の展開には機能しない。だからこそ覚一本などでこの〝移動〟が無意味なものとして消去されるに至ったのだ。このような、物語の展開に機能しない部分を延慶本が存しているのは、事実に根差したものであったゆえと考えるべきではないか。

さて、硫黄島の中で天然の良港と呼べるのは、現在もフェリーみしまが着岸する南側の長浜港ただ一つである（実体として、島の北側は不安定な船着き場しかないので先述の〝移動〟があったのだ）。長浜港が、延慶本のいう「流黄津」だろう。嵐などがやってきたときに船を守ることができるのは、ここだけなのである。ゆえに、今でも島唯一の集落（長浜集落）は、長浜港の背後に広がっている。その脇に稲村岳が横たわっている。このように、三人の居住地を島の北側に、島の本港を島の南側に、それぞれ想定しうるということと、右の「移ニケリ」、「船津マデ来テ」も符合する。

さらに、「蛮岳」「岩殿」を稲村岳であるとすると、延慶本の次の

五

描写とも合致する。

蛮岳トゾ申シケル。鬼界嶋ノ住人等、「アノ蛮ガ岳ニハ、エビス三郎殿ト申神ヲ祝テ、岩殿ト名付タリ。此ノ嶋ニ猛火俄ニモヘ出テ、住人更ニ難堪時、種々ノ供物ヲ捧テ祭候ヘバ、猛火モ定リ大風モノドカニ吹テ、嶋ノ住人自安堵仕」トゾ申ケル。

島に「猛火」が燃え出た（硫黄岳の噴火以外には考えられない）時に「蛮岳」「岩殿」に祈請すると、それが鎮まってくれて「安堵」するというものである。火山（硫黄岳）と村里（長浜村）との間に前衛峰（稲村岳）が存在することによって村里が守られるという位置関係も整合的である。「南ノ方へ五十余町」といい、「離山」といい、硫黄岳や村里との位置関係といい、すべての条件を稲村岳は満たしている。もはや偶然だとは考えられまい。

＊　＊

さて、三人の居住地が島の北側であったことと、南側の稲村岳が延慶本のいう「蛮岳」「岩殿」であることとは、相互補完的に成り立つというわけだが（こういう想定が成り立つ島自体、硫黄島以外にはない）、三人は、硫黄島の北側のどこに居住したのだろうか。それを探る鍵は、延慶本の次のような描写にある。

僧都ハ余リニ悲ニ疲レテ、岩ノ迫ニ沈居タリ。

俊寛一人岩ノハザマ、松ノ木陰ニ留居テ…（中略）…一山皆動揺シケレバ、石岸崩レテ大海ニ入ル。（これをきっかけに俊寛と康頼が禅宗問答をする。）

三人の住居は、島の北側で、海に面しているだけでなく、巨岩のあるところという情報が加わる。その候補地としては、硫黄島の北部にある大谷（ウータン）が最有力である。平家之城（これは中世の薩摩平氏関係の史跡とみられる）の西側で、その名のとおり大きな谷が海に流れ込んでいる地形である。硫黄島の北岸で、人間が身を潜めることができるほどの巨岩があるのは、ここ大谷をおいてほかにない（写真1・2）。ここだと、①島の北側であり、②沖合いの浦々島々（開聞岳が島のように見え、加えて黒島も）を眺めることができ、③身を潜めうるほどの巨岩があるということで、すべての条件を満たす。

写真1　大谷の「岩ノ迫」

しかも、彼らが居住地から熊野三山めぐりをして戻る行程が「僅ニ半日ニ行帰ル路」と表現されていて、それは「南ノ方へ五十余町」とも、ここでの実体想定（大谷―稲村岳周辺の往復）とも整合的である。

大谷以外にもう一か所候補地がある。硫黄島の北東岸、穴の浜の北部に硫黄岳から流

六

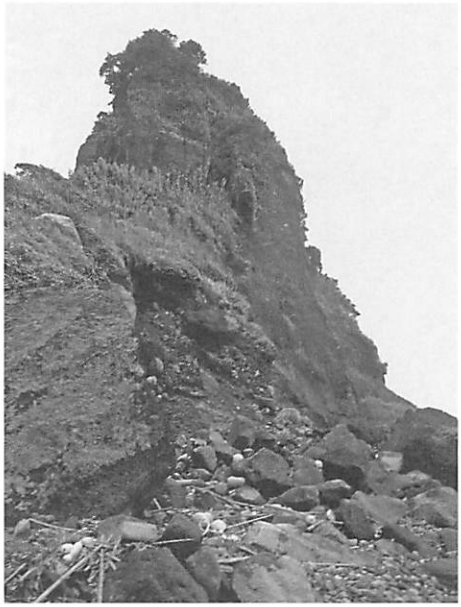


写真2　大谷の「石岸」

れ下る沢が三か所あるが、その一番北の沢がそれである（仮称、穴の浜北沢）。平家之城のすぐ南側にあたり、現在、三島村によってここへ降りる道が整備されつつある。海底から温泉が湧出し、海の色を美しく変えているところである。地図で見るかぎり、この北沢も大局的に見れば①島の北側であり、②竹島、竹島ノ鵜瀬、平瀬という島や岩礁を眺めることができ、③身を潜めうるほどの巨岩がなくはない。ただし、巨岩がいくつかはあるものの、この沢自体が開けたV字型で、暴風から身を守ることができない（写真3）。硫黄島は台風で家屋が倒壊するほど風が強く、風避けは重要な要素である。穴の浜北沢は、人間が長期にわたって居住できるところではない。一方の大谷は、昼なお暗いほどV字谷が深く、風の影響をほとんど受けない（写真4）。その谷が、五〇〇メートルにわたって続いている。もちろん、水も得やすい場所である。このような場所は、硫黄島の中でもほかにない。開聞岳が見えるということもあり、九州本土に焦がれたであろう彼らが住むには格好の場所であったと考えられる。

写真3　穴の浜北沢＝浅い

写真4　大谷の沢＝深い

ただ一つ気になる点としては、大谷を出発点として、稲村岳（「蛮岳」「岩殿」）まで「南ノ方へ五十余町」（約五・五キロメートル）といえるかどうかの距離の問題がある。直線距離（これは空から俯瞰した地図に慣らされた現代人の病弊）で南北三キロメートルの島であるが、大谷から現在の道路を使って稲村岳登山口である岳ノ神[3]に至り、そこから稲村岳山頂まで地図上で道のりを計れば、三・五キ

七

ロメートルほどになる。しかも、当時の道は現在の車道以上にジグザクと左右に振れ、その上、アップダウンも激しい（上からの俯瞰図だけでなく横からの断面図も想像する必要あり）。そのようなジグザク道、高低差、小さな起伏を想定すると、正味「五十余町」になるのではないか。たとえば沢道の真ん中に大きな岩があった場合、直進できれば五歩のところを迂回するので一〇歩かかるなどということが、現実の山道にはあるのである（写真5・6）。

このことを裏付けるために、二〇一二年十一月に大谷―稲村岳を徒歩で実測した[5]。すると、四二一三メートル（麓の遥拝所まで）、四五五三メートル（山頂まで。実測に近い計算）、五三六三メートル（山頂まで。当時の人々の距離感覚第一案）、五七〇六メートル（同上。第二案）という四通りの結果が出た。「五十余町」とまさしく符合する数字だと言ってよい。この誤差は、〈大谷から稲村岳まで〉と言った場合、稲村岳の山頂まで登ることをいうのか、麓の遥拝所をいうのかということにもよるし、あるいは当時の人々の距離感覚の換算の仕方にもよる。総じて「五十余町」という表現と大きな齟齬はないと考えてよい。地図もメジャーもない時代に、おそらく実際に歩いた者の感覚で「五十余町」と表現されたのだろう。大谷こそが三人の居住地であるという想定はまず揺るがないだろう。

写真5　大谷の沢道（1）

写真6　大谷の沢道（2）

八

六　〈硫黄島熊野〉の発見

小稿の核心は、ここからである。第二節で述べたように、歴史上の実体としての平康頼は後白河院の近臣であり、実際に熊野参詣にも同行していた。その康頼が、硫黄島の内に紀州の熊野三山に似た地形を探して、それらを勧請したということは、事実としてありうることではないか。

康頼が硫黄島に勧請したらしき熊野三山を、本家紀州の熊野三山と区別するために、以下、〈硫黄島熊野〉と呼ぶ。

1　〈硫黄島熊野〉の新宮

写真7　熊野神社（新宮相当）

現在の硫黄島に、熊野神社と称するやしろがある（写真7）。長浜港の近くで、そばに長浜川（俊寛川）が流れている。海や川との近さから、これが熊野三山の新宮に相当するものであることは、誰にでも想像がつく（地図2）。これまでは、他の二社に相当するものが発見されていなかったために、現・熊野神社が新宮相当であるなどと言われなかったのである。

なお、この熊野神社は旧称「硫黄大権現」ではないかとの異論が出るかもしれない（鹿児島県立図書館蔵『硫黄大権現宮御本縁』を根拠として）。たしかに、硫黄岳をご神体として、いわゆる〈山宮（奥宮）―里宮（遥拝所）〉の関係における里宮の性格を有した時期があったようだ。しかし、『三国名勝図会』（天保十四年〈一八四三〉）には「熊野三所大権現」「熊野三社権現社」の名称が古くからあり、康頼らの勧請したものとして紹介されている。

地図2　紀州の熊野三山

2　〈硫黄島熊野〉の本宮

硫黄島のほぼ中央に、俊寛堂なる小堂がある（写真8）。現在で

は、〈ひとり置き去りにされた俊寛が、その後を過ごしたところ〉とされているが、どうやらそれは明治以降、歪曲された伝承のようである。『三国名勝図会』によると、俊寛堂は近世まで「御祈（おいのり）大明神社（御祈明神）」「御祈三所権現」と呼ばれていた。同書によると、康頼・成経・俊寛が帰洛を祈った場所とされ（つまり俊寛晩年の居所ではなく）、祠の中に後人が三人を祀ったとの伝をもつ三つの石がある（写真9）。

三人が帰洛のことを祈請した場所としてふさわしいのは、本家紀州でいうと熊野三山の中心たる熊野本宮ではないか。そう考えて地図を見ると、この土地のある特徴に気づく。長浜川がその全流路の中でもっとも屈曲している弧の内側に、現・俊寛堂（御祈明神）が位置しているのである（地図3、写真10）。

知られているように、本家紀州の熊野本宮大社は今でこそ小丘陵の上にあるが、明治二十二年（一八八九）八月の水害時までは現在「大斎原（おおゆのはら）」と呼ばれる中洲に立地していた。そこは、熊野川がC字型に大きく屈曲している場所なのである（写真11・12）。『国史大辞典』「熊野街道」によると、当時の熊野参詣のメインルートは田辺から入る中辺路（なかへち）で、最終日は発心門王子―水呑王子―伏拝王子―祓戸王子―熊野本宮と進んだ。北西の方角から山を下りながら大斎原に迫るわけだが、それは、まるで岬の突端に本宮が鎮座していると感じられるような方向である。著しい熊野川の屈曲を感じながら本宮に接近してゆくような参詣路だったのである。本来の本宮は浮島

写真8　俊寛堂（本宮相当）

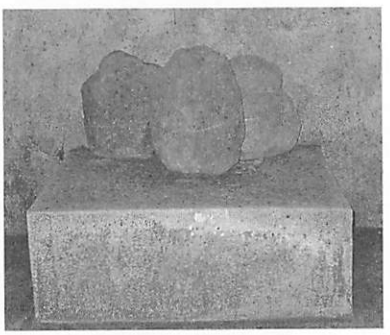
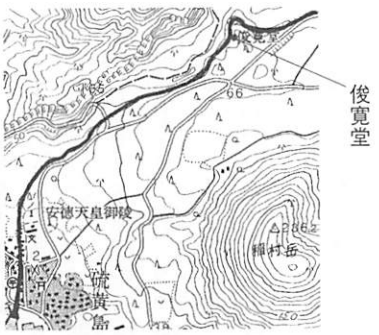


写真9　三つの石



地図3　俊寛堂の立地

写真10　長浜川の屈曲（下流方向）

写真11　明治22年以前の大斎原

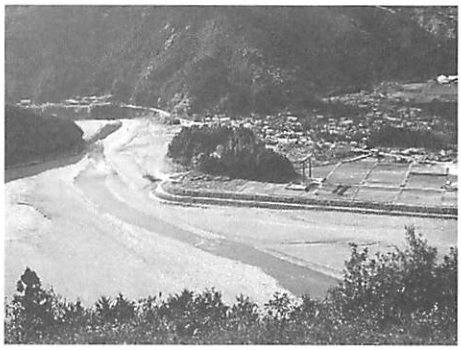


写真12　現在の大斎原

のような地形にあった（後述）が、その周囲をとり巻く川のうち手前側（音無川）が浅かったため、向こう側（熊野川）の水域だけが景観的に目立つことになり、岬の突端のように見えたものと考えられる。

大斎原にあった熊野本宮は、熊野川、音無川、その支流の三川合流の中洲にあって（周囲を水に囲まれた浮島のように見えたはずだ）、定家の『後鳥羽院熊野御幸記』や実意の『熊野詣日記』で、「濡れ藁沓の入堂」と呼ばれる渡渉を経なければ渡れないところにあった（写真13）。五来重が戦前に訪れた時には、音無川はまだ足を水に浸して渡るところであったというし、今でこそ上流にダムが造られて浅い川となってしまった熊野川も以前はより水量の多い川であったという（『熊野詣』）。不浄なるわれわれ衆生が、此岸から水に入るというイニシエーションによって擬似的な死を体験し、清浄なる彼岸（本宮）で生まれ変わるという浄化の回路のためには、なくてはならない地形だったのである。山本殖生（二〇一〇）が指摘するように、死と再生をテーマとする熊野信仰の世界において、周囲を水で囲まれた、水上に浮かぶ社殿とも見える清浄な土地であるというところに、その立地の意味があったのだろう。

この思想はおそらく熊野曼荼羅に通じる（さらにその淵源は四海の中心に須弥山が聳えるという仏教的世界観か）。熊野曼荼羅は重要文化財を含めて数種が知られているが、その古態本らしき系統のものは八葉式と呼ばれる同心円構図を中心に置き、いわゆる円相の中心に阿弥陀如来を描く（写真14）。大斎原の本宮社殿が浮島のようなところに立地しているさまは、曼荼羅の中心たる円相に準えられたに相違ない。熊野曼荼羅は古いもので鎌倉初期の成立とされているが、それは現存本に限ったものであり、世界観の共通性という観点でみれば、熊野信仰の一盛期である院政期に時を同じくしてそ

写真13　院政期の大斎原（推定）
（山本殖生（2010）掲載の画像を加工）

写真14　根津美術館蔵
熊野曼荼羅

の思想はあったとみるべきだろう。曼荼羅の中尊たる阿弥陀仏も、地上の熊野本宮大社も、結界の内側の聖なる空間に鎮座していたというわけだ。

この現象を、たとえば康頼らとは無関係に、平安末期の熊野信仰隆盛の中でどこかの誰かが硫黄島長浜川の最大屈曲点の内側に本宮（御祈明神）を勧請したのだろうとなどと一般化すべきでない。後白河院の近臣として実際に何度も熊野参詣した康頼であればこそ、これほどの拘泥があると考えたほうがよい。平安末期に硫黄島に流された、熊野好きの都人が、康頼以外にいるとは思えない。

＊　　＊

川の最大屈曲点の弧の内側に、紀州、硫黄島双方の〝本宮〟が立地しているという共通点は偶然の一致ではなさそうだが、他に類例が見つかれば、〈地形が似ているゆえにやしろをそこに勧請する〉という当時の思潮の存在が補強できる。

薩摩半島南西部、南さつま市を流れる二級河川・万之瀬川（まのせがわ）の最大屈曲点内側に、熊野社がかつて存在した（地図[6]4・5、写真15）。ここは、阿多平四郎忠景が交易の拠点とした地（港湾の役割を果たした）として近年注目を浴びている持躰松（もちたいまつ）遺跡のある、まさにその中心地である。そのことから、この熊野社が創建された時代相までおおよそ推定できる。すなわち、同遺跡から発掘される貿易陶磁器から、ここが交易の拠点であった時代はおおよそ十二世紀中ごろ～十四世紀中ごろとされているのだ。そういう場所だからこそ、人々が集まり、やしろが勧請されるのだろう。一方で、鎌倉期には紀州の熊野詣でもいったん沈静化する[7]（室町期に再び活性化する）ことの

地図4　万之瀬川の屈曲

地図5　持躰松熊野社の立地

を考え合わせると、持躰松の熊野社は院政期～鎌倉初期に勧請された可能性が高い。これより少し後の時代、たとえば十五世紀以降になると、この地域の中心は南さつま市加世田（別府城、日新寺〈竹田神社〉）や日置市伊作（伊作城）へと移ってゆく。人も住まなくなった時点で人里離れたところに熊野社が勧請されるはずはないし、熊野信仰の熱気が沈静化した時期に勧請されるものでもない。

さて、〈硫黄島熊野〉の御祈明神（俊寛堂）と、持躰松熊野社とは近い地域にあるので、どちらかがもう一方に影響を与えて勧請された（＝川の最大屈曲点内側に熊野本宮を勧請するという知恵の伝授があった）と考えるのが自然だろう。以下に述べるように、〈硫黄島熊野〉は、那智の滝も含めて三山が完備している。しかし、一方の持躰松熊野社は、この本宮相当のやしろ以外には、存在しない。河口に新宮相当のやしろもないし、近くに滝らしきものもない。つまり、三山が揃っている〈硫黄島熊野〉のほうが、本源的な姿を留めていると考えざるをえない。完備した〈硫黄島熊野〉のうち本宮相当のやしろが持躰松に勧請されたという方向性は想定できたとしても、その逆、すなわち本宮相当のやしろしか存在しない持躰松の熊野信仰が硫黄島に流れ、新宮や那智を付加して三山を完備したとは考えにくい（付加された二社の説明ができない）。このように突き詰めると、〈硫黄島熊野〉が硫黄島に勧請された時代相は、持躰松熊野社と同時代（院政期～鎌倉初期）かそれ以前ということになる。

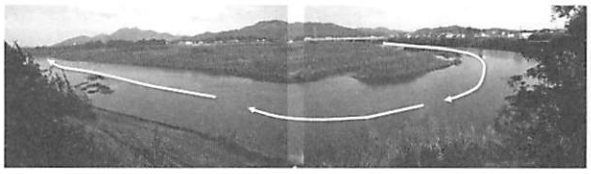


写真15　左奥が熊野社の跡地

このように、持躰松熊野社の存在は、〈地形が似ているゆえにやしろをそこに勧請する〉という思潮が当時存在したことの傍証になるとともに、〈硫黄島熊野〉の時代性を測る根拠ともなるのだ。歴史上の実体たる平康頼が〈硫黄島熊野〉を勧請した可能性は、ますます高くなったと言える。

なお、持躰松熊野社以外にも、川の屈曲点の内側に熊野社が勧請されている例は、東京都葛飾区、愛媛県四国中央市などいくつかある。とくに後者は、熊野社の近くに「新宮」という地名もある。全国の熊野社を精査すれば、そのうち地形の類似によって勧請されたやしろとそうでないものに分けることができ、それらの創建の時代性が判明する可能性もある。

3　〈硫黄島熊野〉の那智

永年、硫黄島に滝は存在しないものと思い込んでいたが、二〇一一年九月の調査において、三島村役場硫黄島出張所の徳田和良所長（当時。現在は前所長）から、滝の存在の教示を受けた。まとまった雨が降った後にしか見られない滝が、島内に数か所ある。徳田所長に案内された滝の中で、もっとも滝らしい滝として紹介されたのが、仮称〈硫黄島那智の滝〉である（写真16・17）。この滝

の画像の提供を徳田所長から受けた際に、その形状を見て衝撃を受けた。本家紀州の那智の滝と酷似しているのである（写真18）。第一に、山の斜面が左右から迫ってV字を成す谷から滝が落ちており、第二に、その幅が広がることなく糸のように落ちており、第三に、その滝が奥行きの前後において滑り台状や階段状になって途中の岩に当たることなく直下に落ちており、第四に、その滝が左右の幅において振れることなく直下に落ちており、さらに第五に、滝壺の直視を遮るかのように向かって左上から右下へ尾根が伸びて滝の下部を隠している（紀州の那智の滝の観望点は那智大社や青岸渡寺。これが一般的な見方だろう。硫黄島の那智の滝の観望点は、稲村岳を周回する道の中で、もっとも滝への視界が開けている地点）。

写真16　発見者徳田和良 前所長
（矢印が滝の流出点）

写真17　硫黄島の那智の滝

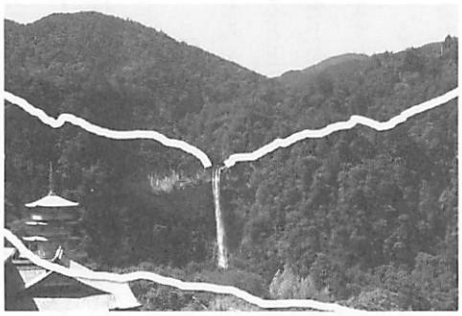


写真18　紀州の那智の滝

滝の形状が似ているかどうかは主観的な問題だろうとか、滝といえばどの滝もV字谷から糸のように流れ落ちるものだろうという反論があるかもしれない。

『日本の滝一〇〇選』の滝の形態分類（同書に収められた一〇〇の滝をその形状から五つに分類）によると、直瀑（まっすぐ直下に落ちる滝）が三六か所、段瀑（右上から左下、あるいは左上から右下へと斜めに落ちる滝）が二八か所、分岐瀑（途中から数本に分かれて落ちる滝）が二二か所、渓流瀑（階段状ないしは滑り台状に手前に向かって落ちる滝）が五か所、潜流瀑（岩の側面から伏流水が噴き出る滝）が九か所である。このうち那智の滝は直瀑に相当するわけだが、三六の直瀑のうち幅広（ナイアガラ風）のものが二四滝、幅狭（糸状のもの）が一二滝である。しかも、この一二滝のうち、四滝は段瀑に近く、やや斜めに（右斜め下へ、左斜め下へ）落ちている。要するに、那智の滝に似ている滝は、現実には一割程度しかないということだ。別に『日本滝名鑑４０００』という四〇〇〇もの滝を収録した写真集もあるが、それを見ても傾向は変わらない。地殻変動に伴って断層が生じる場合に、V

宇谷との関係で上から見ても横から見てもちょうど九〇度近くにならなければ、V字谷から糸のように落ちる滝は形成されない。滝というものはすべて那智の滝のようなものだろうということにはならないのである。これに、左上から右下へと延びる尾根が滝の下部を隠しているところまで似ているとなれば、一割どころか一分も類例は見いだせないだろう。

さて、硫黄島のこの滝が紀州の那智の滝に擬せられたものとすると、都合の良いところがある。康頼は紀州の熊野参詣を三十三度参詣する願を立て、そのうち十八度を果たしたところで流罪にされた。残り十五度をこの〈硫黄島熊野〉で遂げたいと志し、島に着いた「其年ノ八月ヨリ怠ラザル程ニ、次ノ年ノ九月中旬」になってようやく「已ニ参詣十五度ニ満ジヌ」という状況になった。十五回参詣するのに、十三か月かかっているのだから、月に一回程度しか参詣できていないことになる。後述のように三人の居住地である大谷から〈硫黄島熊野〉のある「岩殿」まで「僅ニ半日」の行程で、距離にして「五十余町」（約五・五キロメートル）しかない。あれほど熊野参詣を熱望していた康頼が、これほど近い距離にあるのに月一回程度しか参詣できていないのは不思議である。しかし、先述のように〈硫黄島熊野〉の那智の滝は、まとまった雨が降った後にのみ見られる滝である。雨上がりの条件の良い時を選んで、那智の滝を拝める日のみに熊野三山めぐりを彼らがしていたとすれば、その参詣回数の少なさも納得がいく。

4　今に残る三所詣で

徳田所長に取材して明らかになったことだが、現代の硫黄島にも、熊野三山詣でに似た習俗が残っている（『三島村誌』には記述されていない）。成人式を迎えた若者が、毎年一月一日に三つの聖地をめぐるのだ。それは、集落（長浜村）の中心に集合した新成人が、まず岳ノ神（写真19）に参詣し、次に俊寛堂に詣り、最後に熊野神社に詣でる行事だという（地図1参照）。

岳ノ神は、現地の古老の話によれば、昭和の戦後に今の硫黄岳展望台（硫黄岳の南西側の腰の位置）にあった小祠を岳ノ神の地に遷したやしろであるとされている。展望台にあったというその小祠は、位置関係から見て硫黄岳の遥拝所であったのだろう。しかし、現在の岳ノ神の場所にそれが降ろされる以前から、その場所に蔵王権現社が存在したことは明らかである（『三国名勝図会』『硫黄島要覧』）。つまり、新たな創建ではなく、もとから存在した蔵王権現社に硫黄大権現が合祀されたと考えるべきだろう。もとから存在した蔵王権現社の御神体が硫黄大権現であったならば、追加して展望台の小祠か

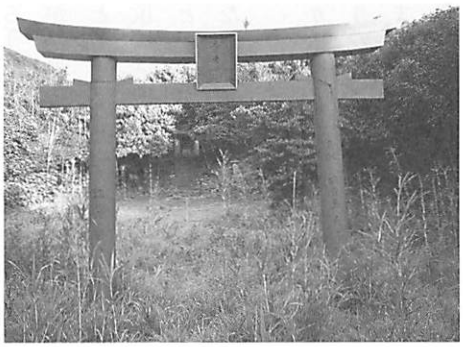


写真19　岳ノ神（旧称蔵王権現社）

ら勧請する必要はなかったはずだ。つまり、言い伝えは正確でない部分を含んでいると考えられる。

だとすれば、岳ノ神（蔵王権現社）とはそもそも何であったのか。その立地は、稲村岳との関係なしには考えられない。稲村岳は富士山にも似た円錐形の成層型火山の体をなしているが、その北東方向にのみ大きな沢がある（写真20）。

この沢の末端の、やや北寄りに岳ノ神があるのだ。もし沢の線の延長線上にやしろを造れば、土石流が発生した際に流されてしまう（実際そういうことがあったのかもしれない）。だから、やや北寄りに立地しているのだろう。現在の稲村岳登山口は岳ノ神より集落寄りだが、自然地形から見てこの沢こそが古代の登山道ではないだろうか（のちには岳ノ神から尾根を経て火山壁の淵を辿るルートになった可能性もある。いずれにしても岳ノ神は稲村岳の入り口に相当する）。推測に頼らざるを得ない部分が多いが、いずれにしてもこの立地と蔵王権現の旧称からみて、岳ノ神は稲村岳を祀った山岳信仰の神社であると考えてよいだろう。すると、延慶本『平家物語』において、「鬼界嶋ノ住人等」が「蛮ガ岳」（稲村岳）に「エビス三郎殿」という神を祀って「岩殿」と名付けたという鎮火の神は、岳ノ神ではないだろうか。稲村岳山頂には祠があるとの伝承があり（祠は未確認）、山全体が「岩殿」という御神体であったとも考えられるが、その遥拝所は岳ノ神だったのだろう。

写真20　稲村岳の北東の沢と岳ノ神（矢印）

さて本題に戻るが、現在でも島の新成人が三所詣でをしている三か所のうち二か所は新宮（熊野神社）と本宮（俊寛堂）である。残りの一か所は今でこそ岳ノ神であるが、もともと康頼らが那智の滝まで回っていた痕跡ではないだろうか。康頼らも現地の人々が「岩殿」を大切に祀っていることを意識している（延慶本）ので、この〈硫黄島熊野〉の三山をめぐる際に、経路の途中にある「岩殿」（岳ノ神）を含めて四か所に詣でていただろう。那智の滝が雨のあとにしか見られないこともあって康頼らの上洛後には滝が聖地であることが忘れ去られ、残る三か所が彼らの三山めぐりの痕跡として残ったのではないか。鹿児島県立図書館蔵『硫黄大権現宮御本縁』には熊野三所権

写真21　俊寛堂（本宮）遥拝所

現のことが記されており、三か所を詣でる風習が古くから存在していたことは疑いない。

なお、岳ノ神―俊寛堂―熊野神社の経路は距離が遠いので、現在では、稲村岳登山口の近くに俊寛堂（本宮）の遥拝所が臨時に設けられ（正月のみ。写真21）、岳ノ神―熊野神社の経路の途中で俊寛堂（本宮）に参詣できるように簡略化されている。

5 〈硫黄島熊野〉と「岩殿」との不可分性（同体性）

以上のように、〈硫黄島熊野〉は三山が完備したものである。形状の類似性だけが注目されるのではない。いま擬定した〈硫黄島熊野〉の三山が、ちょうど稲村岳を周遊するような位置に配置されているのである。延慶本では、康頼らの参詣先を「後生善所ノ為ニ岩殿ニテハタシ候ハバヤ」「二人ツレテ岩殿ヘゾ参リケル」と表現している。硫黄島の〈熊野三山〉に参詣するとは言わずに、「岩殿」に参詣するというのである。つまり、「岩殿」に〈熊野三山〉があるということだ。稲村岳が「蛮岳」「岩殿」であるとすれば、そこを熊野と同体視して参詣するという考え方（表現）と、上述のようなトライアングルの周回路とは符合する（地図1）。

そして、より重要なことは、岩殿にエビス三郎を祀ったという信仰が、荒唐無稽な作り話ではなく当時実際にあったということである（別稿）。その〝事実〟に根ざした岩殿信仰（稲村岳信仰）と、物語内で康頼が語る熊野三山勧請話とが不可分の関係にあると表現されているのである。この不可分性を根拠として、歴史上の実体たる平康頼が実際に紀州熊野を勧請して〈硫黄島熊野〉としたのではないかという想定（そしてそれが延慶本に投影しているという想定）は、側面から補強されることになる。かりに、康頼の熊野三山勧請話と島民の岩殿信仰話、この二つの伝承が物語の形成過程で別々にもたらされ、つぎはぎ的に接合されたならば、テクスト内でこうは表現されないということだ。

七　三つの問題点

硫黄島の地理・地形はすべて紀州熊野と一致するのか、あるいはまた延慶本の表現がことごとく硫黄島の地理と一致するのかを吟味すると、三点だけ検討しなければならないところがある。

一点目は、三山の配置が、紀州と硫黄島とで、鏡を当てたように左右対称になっているということである。それには二つの理由が考えられる。第一には、那智の滝（相当）が、紀州では熊野川の右岸方向（西側）にあるのに対して、硫黄島では長浜川の左岸方向（東側）にある。このため三山全体を線対称とせざるをえなかったのだろう。第二には、川の屈曲点に本宮相当があることは共通しているといっても、本家の熊野本宮（大斎原）付近は、熊野川が下流に向かって左側に飛び出した屈曲であるのに対して、硫黄島の御祈明神（俊寛堂）付近は、長浜川が下流に向かって右側に飛び出した屈曲なのである。これも線対称である。このような自然地形に制約されて、唯一人為的に左岸か右岸かの立地を定められそうな硫黄島の新

宮相当（熊野神社）を、左岸に定めたのだろう。これによって、〈硫黄島熊野〉は、三山まるごと紀州の熊野三山を線対称に写し取ったような位置関係にすることができたのである。逆の言い方をすれば、いかんともしがたい自然地形の制約を受けつつも、いかに本家の熊野三山に準えようとする意識が〈硫黄島熊野〉の勧請者（康頼）には強かったか、が窺えるのである。この問題は、延慶本の表現と現地・硫黄島とが齟齬するというものではないので、たいした問題にはならない。

二点目は、〈硫黄島熊野〉の本宮相当が、延慶本では「大ナル岩屋」の上にあることになっているが、現・俊寛堂はそのような「岩屋」に立地していない。じつは、『三国名勝図会』によると、俊寛堂は「往古、俊寛の石塔、此川原の上にありしに、雨水洗崩して」、「現在の谷合の如き処にて、山間の地を削平」して移したのだという。ここにいう「川原の上」とは上流の意ではなく〝川原の岩の上に乗せるように〟の意である。現在の長浜川の河原には人頭大の石が散見し、かつての大岩が割れた痕跡ではないかともみえる。ただし、延慶本にはさらに「岩屋」の上に「椙一叢生タリ」とあるが、杉が何本か生えるほどの巨岩がかつて存在したようには見えない。このようなことから、〈硫黄島熊野〉のすべての地形・地勢が延慶本『平家』の表現と一致するわけではない、と考えたほうがよさそうである。歴史的実体としての平康頼が硫黄島に熊野三山を勧請したことは事実として、それが一方で硫黄島に地形や史跡として残り、もう一方で延慶本の表現になっているとみるべきだろう。延慶本には当然虚構的な描写も含まれていると考えられるわけである。

三点目は、「彼嶋ハ嶋ノマハリ西国廿里ノ嶋也」の表現である。『延慶本平家物語全注釈』によると、「西国」の「里」とは要するに近世以降一般化した約四キロメートル＝「里」のことであるらしい。実際の硫黄島は周囲約一四・五キロなので、「西国廿里」（約七八・五キロ）は、現地の状況と明らかに齟齬する。『延慶本平家物語全注釈』はこれを「ほとんど屋久島に匹敵するほどの大きさ」と表現し、「有王説話を含め、諸本の鬼界島描写は、そうした規模の島を想像したほうがわかりやすい面が多い」と述べているが、屋久島には硫黄岳のような活火山はないし、「離山」らしきものも、また熊野三山に擬定できる地もない。外周の距離だけが近いことをもって、屋久島に準えるのは適切ではない。有王が俊寛の姿を求めて山へ磯へとさまよっても巡り会えなかったことから規模の大きな島をイメージしたのだろうが、実際の硫黄島を歩けば、探し求める人と簡単には出会えないような質量感があることを知るはずだ（そもそも有王説話は別に考えるべきである）。

先述のように、俊寛は、赦免船が最初に到着した地点（三人の居住地である島の北側）から、出帆した地点（島人の居住地や本港がある島の南側）まで、徒歩で移動している（船に乗せてもらえたとも思えないので）。屋久島のような大きな規模の島を想定すると、三〇キロメートル前後を俊寛が徒歩で移動したことになり、非現実的である。また、北の居住地から「五十余町」離れた南の「岩殿」（熊野三山）まで「半日」で往復できたという距離感覚の表現も延慶本

には存在し（「僅ニ半日ニ行帰ル路ナレド、同（ジ）所ヲ行帰リ行帰リ」）、これと合致するのはむしろ硫黄島のほうである。つまり、「西国廿十里」には、何らかの錯誤を想定せざるをえないということだ。

これについて、「西国廿里」が「西国七里」（約二八キロ）の誤写ということは考えられないだろうか。現存の応永書写延慶本に至るまでのどこかの段階で誤写が起こったと想定するものであり、必ずしも現存本の字体に拘泥しなくてもよいのだが、中世の漢字片仮名混じり文の文化圏の文字資料として、たまたま応永書写延慶本『平家物語』（大東急記念文庫蔵）の事例をここに挙げる。

「廿」の例

（第一末　五八オ）

「七」の例

（第一本　一〇〇ウ）

このように、字体として「廿」の右半分と「七」とは近似しているといえる。少なくとも「七」の最終筆を跳ね上げれば「廿」と読み間違える可能性は十分にある。そして、周囲二八キロメートル（「七里」）と同十四・五キロメートル（実際の硫黄島）との差についてだが、当時の人が島の広さをいうときに、たとえば硫黄岳の山頂に立って島の周囲をぐるりと見回して「西国七里」と表現してしまうことや、舟に乗って島を周回した感覚で「西国七里」と大雑把に言い表してしまうことも、十分にありうることではないだろうか。

八　おわりに

あまりにも延慶本の表現や紀州熊野と〈硫黄島熊野〉とが符合するので、『平家』の成立後に、物語が現地に影響を与えたのではないかという疑念が出るかもしれない。しかし、物語に似せるために土木工事をして川を屈曲させたり、滝を作ったりするなどということは考えられない。また、持躰松熊野社と同時代かそれ以前にまで〈硫黄島熊野〉が遡ることが判明したことによっても、物語から現地が影響を受けたということは考えられない。硫黄島の稲村岳信仰が――いずれ明瞭になってくるだろうが――日本神話の源流とでもいうべき様相を保存していることも、大きな補強材料となる。

ところで、四度目の硫黄島の調査のおり、運よく植物学者吉良今朝芳（元鹿児島大学教授、元鹿児島国際大学教授）の講話を現地で聞くことができた。[8] 硫黄島には、ノイチゴ、グミ、タラの芽、ヤマノイモ、ヨモギ、ゼンマイを初めとして、食用になる植物が三〇〇種類以上もあるとのことだった。いわゆる捨て殺しのような流罪であったとしても、ある程度は流人が生存できたということだ。これも、硫黄島に流されて人が生きていけようはずがないという先入観

を否定しうる材料となる。

冒頭で、実体密着性（事実性）の濃淡に着目すると、延慶本の重層的形成過程が見えてくると述べた。小稿で述べたように、延慶本『平家』の一部には、間違いなく現地の実体に根差した部分があるということが判明した。ことに、地理的にはすこぶる現地に忠実である。ということは、同時に、実体に根差していない部分もすでに見え始めたということだ。異郷らしき島の描写や、辺民たる島民の描写などである。また、砂浜のほとんど無い硫黄島に砂浜をイメージしているところもある。それらについては、いずれ詳しく述べたい。今ここで言えることは――諸本比較による古態性の検証とは別の観点から――延慶本『平家物語』の形成過程の解明に、間違いなく突破口が開いたということである。

注

（1）延慶本の引用テクストは、北原保雄・小川栄一編（一九九〇）による。延慶本の影印は、『大東急記念文庫　平家物語』第一巻～第六巻（汲古書院、一九八二～三）による。

（2）小稿の中で「前稿」と呼ぶのは野中哲照（二〇一二）。一方、「別稿」と呼ぶのは、これから執筆予定の稲村岳信仰に関する論、康頼像の重層性に関する論。

（3）康頼の伝記や年齢については、山田昭全（一九七五）、佐々木紀一（二〇〇九）による。

（4）近代以降の稲村岳登山口はその北麓の水道タンク脇とされているが、往古は自然地形を利用すべく沢筋を上ったものと考えられるので、北東麓の岳ノ神が登山口であったと考えられる。

（5）事前準備として筆者の平地での歩幅の平均値を計った。緩い登り坂で五二センチ、平坦地で五四センチ、緩い下り坂で五六センチであった。ここではその平均値を採って一律五四センチで計算することにした。また、大谷～岳ノ神を平地部として計測したものの、現在、岳ノ神からの沢道は登れないため、水道タンク近くの稲村岳登山口から山頂三角点までの距離を別に測り、あとで合算する方式を採った。ただし、沢道でも尾根道でも、距離に大きな差は出ないとみられる。以下、本文に示した四つの数字の詳細を示す。

まずは最終的に取り下げた考え方だが、〈平地部と山間部とを分け、地勢に忠実に実測的な数字を出すという方針で臨んだ場合〉…大谷～岳ノ神の平地部は四一五〇歩で、これに五四センチを乗じて二二四一メートル。ただし、これはアスファルト道路を歩いた歩数なので、当時のアップダウンやジグザグを考慮しなければならない。さいわい、大谷の沢（約五〇〇メートルの長さ）は古代から変わらぬとみられる自然の道なので、その区間でアスファルト道路を歩いた歩数と沢道を歩いた歩数とを比較してみると（沢道とアスファルト道路が並行して走っているので比較しやすい）、前者を歩くと七九〇歩で済むところ、後者を歩くと一四八五歩かかった。後者（当時の沢道）は前者（現在の車道）の一・八八倍の距離感覚だということになる。そこで、二二四一メートル×一・八八倍で四二一三メートル（①）。「岩殿」までの距離が麓の遥拝所までということなら、この数字となる。一方、稲村岳登山口～山頂の山間部は一一三三歩（上り一一一八歩、下り一一四八歩の平均値。じつは上りと下りの歩数はあまり変わらない）で、山間部での歩幅を平均三〇センチとみて乗じれば、約三四〇メートル。平地部の四二一三メートルと山間部の三四〇メートルとを合計して四五五三メートル（②）となる。

次に、当時の人々が歩数を頼りに距離を測る際に、平地部と山間部とに分けることはしないと考えて、〈平地部と山間部とを分けない方針で臨んだ場合〉…平地部の四一五〇歩と山間部の一一三三歩とを合

わせて計五二八三歩。これに五四センチを乗じて二八五三メートル。これに調整用の一・八八を乗じれば五三六三メートル（③）となる。ところが、調整用の一・八八倍は大谷周辺で、沢道とアスファルト道路とが並行に走っているところからはじき出した数字なので、山間部を含めて考えれば調整用の数字は一・八八倍ではなく二倍程度と考えるべきかもしれない。二八五三メートルに二・〇〇を乗じれば五七〇六メートル（④）となる。

なお、調査時点で稲村岳山頂の三角点から先は竹藪のため進むことができなかったが、伝承の小祠は八〇メートルほど先ではないかと考えられる。そういう誤差は当然あるだろうし、本文中でも述べたように、山頂までなのか麓までなのかも不明である。しかし、地図で俯瞰するのとは違い、徒歩によって実測すると「五十余町」は島の実勢に合っているといってよいだろう。

（6）現在の持躰松遺跡周辺の万之瀬川は、改修が行われて流路が変化している。地図4は明治三五年測量の地図をもとに復元した市村高男（二〇〇三）による。川の屈曲が見やすいように、川を黒く塗りつぶした。

（7）松田文夫（二〇〇四）によると、後鳥羽院の二十二回の熊野詣で（最後は承久三年＝一二二一）のあと、後嵯峨院は三回（一二五〇、一二五五、一二五七）しか参詣しておらず、それから二十年以上も間があいて亀山院は一度だけ（一二八一）参詣している。それと入れ替わりに一遍が文永十一年（一二七四）に本宮に参籠し、時宗を中心とした熊野信仰の二度目の盛期が訪れる。

（8）二〇一二年二月十三日の夜に三島村開発センターで行われた「6次産業化に向けての勉強会」。

参考文献

冨倉徳次郎（一九六四）『平家物語研究』東京：角川書店

北原保雄・小川栄一編（一九九〇）『延慶本平家物語　本文篇』東京：勉誠社（一九八二～三）『大東急記念文庫　平家物語』第一巻～第六巻　東京：汲古書院

延慶本注釈の会（二〇〇六）『延慶本平家物語全注釈』第一末（巻二）東京：汲古書院

向井芳樹（一九七六）「俊寛の遺跡―二つの硫黄島」「帝塚山学院大学研究論集」11号

大石直正（一九八〇）「外が浜・夷島考」『関晃先生還暦記念日本古代史研究史』東京：吉川弘文館

源健一郎（一九九一）「源平盛衰記における平康頼像―猿楽・法楽・夢想」「関西大学日本文学研究」三号

佐倉由泰（二〇〇六）「「きかいが島」のさまざまな見え方―『平家物語』の記述の多元性と偏向性」「国文学　解釈と鑑賞」七一巻五号

野中哲照（二〇一二）「薩摩硫黄島の境界性と『平家物語』」「鹿児島国際大学国際文化学部論集」第13巻第2号

馬場光子（二〇一〇）『梁塵秘抄口伝集』東京：講談社（学術文庫）

山田昭全（一九六五）「平康頼伝記研究（その一）　後白河院近習時代」「大正大學研究紀要　佛教學部・文學部」61号

佐々木紀一（二〇〇九）「平康頼贅伝」「米沢国語国文」三八号

五来重（一九六七）『熊野詣』東京：淡交社／講談社学術文庫、二〇〇四

景山春樹（一九七一）「熊野曼荼羅の研究」「那智叢書」第十六巻

加藤隆久編（一九九八）『熊野三山信仰事典』東京：戎光祥出版

松田文夫編（二〇〇四）『熊野三山史年表　崇神天皇65年（3世紀）から平成12年（二〇〇〇）まで』

山本殖生（二〇一〇）「熊野三山の原像を聖地景観から探る」「山岳修験」四六号

五代秀堯・橋口兼柄（一九六六）『三国名勝図会』鹿児島：南日本出版文化協会／青潮社、一九八二

市村高男（二〇〇三）「11～15世紀の万之瀬川河口の性格と持躰松遺跡――津湊泊・海運の視点を中心にした考察――」「古代文化」第55巻

第２号
中村和美・栗林文夫（二〇〇三）「持躰松遺跡（２次調査以降）・芝原遺跡・
　渡畑遺跡について」「古代文化」五五巻二号
三島村誌編纂委員会（一九九〇）『三島村誌』鹿児島県：三島村
グリーンルネッサンス事務局編（一九九一）『日本の滝一〇〇選』東京：
　講談社
木田 蕪（二〇〇五）『日本滝名鑑４０００』大阪：東方出版